

2024 度実施の学修行動と学修成果の調査アンケートの分析結果

ヒューマンケア学部看護学科

ヒューマンケア学部看護学科では、ディプロマ・ポリシー（以下 DP）を評価するために、全学年に「コミュニケーション」、「レポート記述」、「討議（カンファレンス）」、「自己管理」の項目を加え、さらに 1 年生・2 年生では「根拠となる知識・技術」3 年生では「根拠となる知識・技術」「実践力」「プロフェッショナリズム」、4 年生では「実践力」「プロフェッショナリズム」のアンケート項目を加えて調査している。

1. 授業関連

1) 【授業の予習や復習、授業課題のための勉強】

1,2,4 年において最も多いのは「時々した」であった。3 年生は、「かなりした」が 45.0%(昨年 42.1%)で 1 番多かった。「時々した」の割合は、1 年生 46.2%(昨年 59.3%)、2 年生においては 54.0%(昨年 56.1%)、3 年生においては、28.4%(昨年 30.8%)、4 年生は 39.2%(昨年 50.0%)だった。

今年度の 4 年生の授業の予習・復習の結果をみると、「頻繁にした」「かなりした」が昨年 33.9%であったが、今年度においては 53.8%と著しく上昇していた。また、4 年生においては、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」の 3 回答が、全体の 93.0%(昨年 83.9%)を占めており、昨年度より改善傾向にあった。また、その他の学年の結果では、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」が 1 年生 90.9%(昨年 87.5%)、2 年生 84.4%(昨年 85.0%)、3 年生 93.6%(昨年 95.5%)であった。

一方、「あまりしなかった」「全くしなかった」について、昨年の 4 年生の合計は、16.1%であったが、今年度は「あまりしなかった」が 6.9%、「全くしなかった」が 0%と改善傾向であった。その他の学年では、1 年生の「あまりしなかった」「全くしなかった」が合計 9.1%、2 年生の「あまりしなかった」「全くしなかった」が合計 15.3%、3 年生の、「あまりしなかった」「全くしなかった」の合計が 6.4%であり、3 年生においては昨年の 4.6%より上昇していた。3,4 年生の「あまりしなかった」「全くしなかった」の回答結果から考察すると、4 年生になっても学習姿勢が定着していない学生もいると考えられ、今後も見守りや必要時、指導が必要と考える。

2) 【就職や資格取得に関わる勉強】

「頻繁にした」と「かなりした」の割合は、1 年生 25.7 % (昨年 17%)、2 年生 19.4 % (昨年 15.9%)、3 年生 38.5 % (昨年 34.5%)、4 年生 76.2 % (昨年 64.2%)で、全学年上昇を示し、例年と同様に、4 年生で急激に上昇している。今年度の 1 年生の割合が上昇しているのは、就職・資格取得について、講義などで情報を知る機会を得て、自己の学習に繋がったのではないかと考える。2 年生の割合が例年最下位であり、この割合を上げていくことが課題であると考え。3 年生の上昇は、就職試験日が年々前倒しされ、早期に就職試験が開始になることなどで意識が高まったのではないかと考える。また、4 年生に関しては、昨年と比較し、12%上昇している。模試等の結果は、例年より低い傾向を示していたが、学生の意識としては高い結果が出ている。一方、4 年生になっても資格の学修について、

「あまりしなかった」3.1%と「全くしなかった」が0.9%であり、昨年の合計7.5%(一昨年6.5%)より改善しているが、更なる早期からの指導の徹底を図る必要がある。

2. 授業時間以外の学修時間

【授業時間以外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間】

多い順に見てみると、1年生では1～2時間が最も多く46.2%、次に2～3時間22.7%、2年生では1～2時間が最も多く37.9%、次に2～3時間33.1%、3年生では2～3時間が32.1%、次に1～2時間が28.4%であった。4年生では、3～4時間が29.4%、2～3時間が22.3%、4～5時間10%、5～6時間8.5%、6～7時間0.8%、7～8時間0%、8時間以上は0.8%であった。(但し、調査時間の変更が生じているため、昨年度のデータとの比較は不可である。)4年生は3～4時間の学修時間が最も多い割合であるが、国家試験前の勉強時間としては少ないと考えられ、1時間未満の学生も8.5%存在した。4年生は、個々の学生の捉え方により国家試験の学習時間にも差がでる結果となっている。最近の傾向では、学習行動が定着せず、毎日決まった時間で学習をしていない学生の存在も多くあり、国家試験勉強に着手する時期が遅い学生も例年増加傾向であるため、前期から着手できるように教員の指導を強化していく必要がある。

3. 本学の教育内容や設備、学修支援の満足度

【授業の内容】

「とても満足」、「かなり満足」、「やや満足」を含めると、1年生は90.9%(昨年90.3%)、2年生は89.5%(昨年87.9%)、3年生は96.3%(昨年88.7%)、4年生は90.0%(昨年91.5%)であった。昨年と比較すると1～3年生において上昇していた。今回の結果より、教育体制も整ってきており、学生の期待する授業が展開されていたと考える。一方、「とても不満」は、1年生は0.8%(昨年0.7%)、2年生1.6%(昨年1.9%)、3年生0.9%(昨年1.5%)、4年生0%(昨年2.8%)であり、学生の不満足度の割合は少ないものの一部の学生は不満に思っている現状がある。今後も、丁寧な授業を展開し、変動を評価していく必要がある。

【演習室や実習室の設備や器具】

「とても満足」、「かなり満足」、「やや満足」を含めると、1年生は96.2%(昨年94.8%)、2年生95.1%(昨年95.3%)、3年生97.3%(昨年97.0%)、4年生97.7%(昨年94.3%)であった。こちらは、2年生以外は、上昇しており、本学の演習室環境の充実及び活用状況が学生の高評価に繋がっていると考ええる。

【大学全般を総合的に判断して】

「とても満足」「かなり満足」の合計は、1年生40.2%(昨年45.2%)、2年生41.2%(昨年32.7%)、3年生51.4%(昨年38.4%)、4年生56.2%(昨年45.2%)であった。1学年以外は、満足度は昨年度より改善している。一方「やや不満」「とても不満」に着目してみると、1年生9.1%(昨年9.6%)、2年生9.7%(昨年12.2%)、3年生4.6%(昨年7.6%)、4年生5.4%(昨年6.7%)となっており、全学年、不満に関しては減少しているものの、1,2年生の不満足度が3,4年生より高い傾向を示している。演習の練習時間に対する不満などが生じていることも考えられ、学生がどのような部分で、考えているのか、それぞれの考えを導き出す

必要がある。

4. 各学年に共通する能力の修得

①コミュニケーション能力

1年生の【日本語や英語を用いて、口述や記述により効果的なコミュニケーションを行えるようになった】では、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が、31.8%、「少し当てはまる」が、56.1%であった。まだまだ、成長過程の途中であり、今後の変化を見守っていく必要がある。2,3,4年生の【人間関係形成におけるコミュニケーションの重要性を理解できるようになった】では、2年生は「十分当てはまる」、「かなり当てはまる」を合わせると、66.1%、3年生 84.4%、4年生は 81.5%となり、3年生以降、能力が身についたと自己評価している。3年生においては、実習による対象に対するコミュニケーションも身に付くことが考えられ、コミュニケーションの重要性に対する理解も上昇していたと考えられる。学年が上がるにつれ、コミュニケーション能力は向上傾向であるが、4年生は臨地実習に行く時間が著明に少ないことや国家試験勉強等と重なり、コミュニケーション能力の重要性に対する評価が3年生より低くなったのではないかと考える。

②レポートの作成

1年生は、レポートに関する設問は設けていない。2,3,4年生の【文章の構成を考えながらレポートを作成することができるようになった】は、「十分当てはまる」と「かなり当てはまる」と答えているものは、2年生 57.3%、3年生 53.3%、4年生 78.5%であった。「あまりあてはまらない」「全く当てはまらない」においては、2年生は 5.6%、3年生は 4.6%、4年生は 1.5%が身につけていないと考えていた。2年生、3年生、4年生の順で、低下していた。レポート作成も、コミュニケーション能力同様、経験を重ねることにより、能力が上昇したと考えられる。低学年からのきめの細かい指導の継続が重要と考える。

③討議（カンファレンス）

1年生の【他者を思いやり権利を守りながら、自分の思いや考えを伝えるアサーティブな姿勢が身についてきた】は、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が、62.1%で、「少しあてはまる」を入れると、94.7%であった。2,3,4年生の【他人の意見を聞き、自分の意見をまとめて発言する姿勢が身についてきた】では、2年生は「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 54.8%（昨年 56.1%）、「少し当てはまる」は、41.9%であった。3年生は「十分当てはまる」「かなり当てはまる」73.4%（昨年 66.2%）、「少し当てはまる」が 24.8%であった。4年生は「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 78.5%（昨年 69.8%）、「少し当てはまる」が 19.2%であった。3,4年生の伸びが高く、1学年からカンファレンスを実施し、力を積み重ねてきた結果と考える。各学年ともに、「少し当てはまる」以上の回答をした学生は、それぞれの学年で 95%を超えておりカンファレンスでの学びを着実に深めていることが考えられる。

④学習方法の獲得

1 年生では、【学修や課題に対し、主体的、客観的、創造的に取り組む姿勢が身についてきた】では、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が、55.3%、「少し当てはまる」が 40.2%であった。2.3.4 年生の【自身の学習方法を獲得できた】では、2 年生は、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 44.3%(昨年 42.1%)、「少し当てはまる」が 46.0%(昨年 55.1%)であった。3 年生では「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 61.4%(昨年 55.6%)、「少し当てはまる」が、33.0%(昨年 38.3%)であった。4 年生では「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 72.3%(昨年 68.0%)、「少し当てはまる」は 24.6%(昨年 29.2%)であった。学年が上がるにつれて増加傾向であった。今年度の学生においては学習方法も十分獲得したと考えられる。他学年と比較し、2 年生の「十分当てはまる」「かなり当てはまる」の評価が低く、低学年の学習指導方法及び定着のための指導の検討の必要がある。

5. 各学年で修得すべき能力

1) 1 年生

1 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が高いものを見てみると、【チームの中で、自己の役割を果たすためのリーダーシップやメンバーシップを発揮できるようになった】であり、17.4%であった。各講義内でグループワークも実施されているが、まだグループワークでの役割が定着していないと評価している学生もあり、複数回の体験が効果的と考える。次に「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」が多いものとして、【日本語や英語を用いて、口述や記述により効果的なコミュニケーションを行えるようになった】で、12.1%、その次は【常に自己省察を行い、困難な状況にあっても柔軟で粘り強く対応しようとする姿勢が身についてきた】で、7.6%であった。その他、「少し当てはまる」の回答が多い項目も散見されるが、昨年、一昨年と比較し、全体的に改善している。2, 3 年次の変動を継続して、評価していく必要がある。

2) 2 年生

2 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が高いものとして、【自身の学習方法を獲得できた】が、9.7%(昨年 2.8%)であった。次に「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が高いものは【読み手の読みやすさを考えてレポートを書くことができるようになった】が、8.8%、次は、【討議を効果的かつ効率よく進めるための役割ができるようになってきた】の 7.2%であった。1 年生同様、「少し当てはまる」の項目も高いところがみられた。学習方法が確立されていない学生もいるため、対象によっては教員が指導も必要と考えられる。討議については、2 年生の座学中心の教育から、3 年生の臨地実習でのグループワーク等に発展していくことから、今後の改善が期待される。

3) 3 年生

3 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が最も高いものとして、【研究を通して、分析的・批判的に考える姿勢が身についてきた】が、9.1%(昨年 16.8%)で、卒業研究に対する学習でクリティークについて、苦手意識を持っている学生が多いことを示しているが、昨年よりも改善している。2 番目に、【興味・関心が

持てる看護分野を見つけることができた】が、8.2%(昨年度 8.3%)、3 番目に【看護の国際化や災害時の対応など看護師としての視野が広がってきた】が、5.5%(昨年 6.8%)であった。ここは、改善しているが、例年卒業研究に関しては、学生が負担感を持つため、今後の変動を継続してみていく必要がある。興味・関心が持てる看護分野を見つけることができたで低い傾向を示しており、学生に看護の面白さや自分の看護に対する達成感の充実感など体得できるような指導が必要である。

4) 4 年生

4 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が最も高いものとして、【グループワークを通して、まとめ方、発表の仕方などが身についてきた】が、3.9%であった。2 番目に「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」が 3.1%あるものとして、【看護の国際化や災害対策の対応など看護師としての視野が広がってきた】、【自身の学習方法を獲得できた】【専門職者としての責務を自覚し役割を果たす姿勢が身についてきた】【看護師として人々の生活に貢献する意欲が高まってきた】の 4 回答であった。その他の項目は、すべて 3.0%以下の低い値であった。グループワークでの能力は、臨床実習で経験することで全体的に高まっているが、その中でもまだ自信を持っていない学生もいるため、教員の積極的な介入も必要な場合もあると考える。

また、4 年次で、「十分当てはまる」、「かなり当てはまる」「少し当てはまる」で 100%を示したものは、【看護師として、ふさわしい行動とは何かが理解できるようになった】【統合実習を通して、病棟におけるリーダーシップ、メンバーシップの重要性が理解できるようになった】である。次に「十分当てはまる」、「かなり当てはまる」「少し当てはまる」で 99.8%を示した項目は、【実習を通して、看護倫理や医療安全の考え方や行動が身についた】【実習を通して、対象に必要な看護技術を実践できるようになった】【実習を通して、多職種と協働、連携する重要性を理解できるようになった】【実習経験録にある看護技術について、自身の看護技術水準と提示されている卒業時の達成度との差を認識し、それを補うための努力ができた】【看護職は、生涯にわたって学習が必要であると認識できた】である。これは、学生の 4 年間の学習の積み重ねの結果であり、本学が重要と考えているプロフェッショナリズムが身に付いた結果として評価できる。全ての項目で、100%になることは困難と思われるが、教員の介入でその評価に近づけるように今後も指導を強化する必要がある。

2024年度 ヒューマンケア学部 柔道整復学科

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

1. はじめに

柔道整復学科は学科のディプロマポリシーに記載されている「柔道整復学に係る広い知識と技術を習得し、患者の健康や生活の向上に役立つ人材を育成する」を踏まえてアンケート分析項目を設定し、学修プロセスにおける変化・成長を調査した。本報告では、2024年度を含めた5年間のデータについて、予習・復習状況、進路関連、専門的な知識・技術の習得について主な項目について比較し、分析した。

2. アンケート調査について

1) 調査時期：2024 年度 1～4 年次について UNIPA にて実施した。

2) 学生数（表 1）

表 1 学生数（※2024 年 4 月時点）

年度\学年	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
2020	136	106	88	101	431
2021	133	124	101	91	449
2022	131	129	120	105	485
2023	132	126	122	128	508
2024	120	120	116	125	481

3. 解析結果

1) 授業関連について（表2）

表 2 授業の予習や復習

質問項目	年度	回答内容		
		頻繁にした/ かなりした	時々した	あまりしなかった/ 全くしなかった
授業の予習や復習	2020	27.6%	49.2%	22.9%
	2021	28.0%	56.5%	15.5%
	2022	26.0%	53.2%	20.9%
	2023	26.3%	52.8%	20.9%
	2024	37.4%	48.5%	14.2%

「授業の予習や復習」に関する結果は表2の通りである。5年間で比較すると、2024年度の予習・復習を行った（頻繁にした／かなりした）が37.4%であり、過去5年間で最も多い割合となった。また、予習・復習を行なわなかった（あまりしなかった／全くしなかった）という回答が14.2%であり、過去5年間で最も低い割合であった。学修に対する意識の向上がみられ、資格取得を目指す当学科として次年度以降もさらに意識の向上を目指していく。

2) 授業中以外の時間について（表3）

表 3 「manaba」やインターネットを活用した自習

質問項目	年度	回答内容	
		頻繁にした/かなりした/時々した	あまりしなかった/全くしなかった
「manaba」やインターネットを 活用した自習	2020	75.6%	24.3%
	2021	62.8%	37.1%
	2022	76.6%	23.4%
	2023	76.8%	23.2%
	2024	82.4%	17.5%

2020度から e ラーニングの主体である「manaba」やインターネットの活用が高まったが、それ以降はほぼ75%程度で推移していた。2024年度は「頻繁にした／かなりした／時々した」が82.4%と過去5年間で最も多い数値となった。これは、2020年度に活用されたオンライン学修法が学生と教員ともに定着し継続されたものと考えられる。

3) いまの不安や悩みについて（2021年度より項目を新設）（表4、5）

表 4 卒業後のやりたいことがみつからない

質問項目	年度	回答内容	
		大いにある/少しある	あまりない/全くない
卒業後のやりたいことがみつからない	2021	40.8%	59.2%
	2022	41.8%	58.3%
	2023	40.6%	59.4%
	2024	42.4%	57.7%

表 5 希望の就職先や進学先に行けるか不安

質問項目	年度	回答内容	
		大いにある/少しある	あまりない/全くない
希望の就職先や進学先に行けるか不安	2021	73.8%	26.2%
	2022	67.5%	31.9%
	2023	66.7%	33.3%
	2024	65.0%	35.0%

こちらは2021年度新設項目であり、学生の進路調査に関わる内容である。
表4において過去4年間では「卒業後のやりたいことが見つからない」学生は4割程度の推移となっている。表5では「希望の就職先や進学先に行けるか不安」に思う学生も65.0%となっているが、全体として2021年度から減少傾向にある。今後もセミナー授業における個人面談を繰り返し行い、学生の希望に沿った就職先や進学先を見つけることが課題となる。当学科のディプロマポリシーにある「専門的職業人」「職業倫理」「次世代を担うリーダー」等に相応しい進路を考えていくことが大切である。

4) 専門的な知識と技能の修得について（表6、7、8）
全学年の柔道整復に関する基本的な知識、技術、総合力に関する結果は以下の通りであった。

①柔道整復に関する基本的な知識

表 6 柔道整復に関する基本的な知識

質問項目	年度	回答内容				
		十分付いた	かなり付いた	少し付いた	あまりついていない	全く付いていない
柔道整復に関する基本的な知識	2020	7.5%	38.4%	46.5%	7.3%	0.3%
	2021	6.6%	39.4%	49.0%	4.3%	0.0%
	2022	6.0%	38.2%	54.5%	1.3%	0.0%
	2023	8.8%	44.2%	43.6%	2.7%	0.7%
	2024	15.0%	43.0%	38.5%	2.9%	0.7%

②柔道整復に関する基本的な技術

表 7 柔道整復に関する基本的な技術

質問項目	年度	回答内容				
		十分付いた	かなりついた	少し付いた	あまりついていない	全く付いていない
柔道整復に関する基本的な技術	2020	6.0%	35.2%	52.3%	6.3%	0.3%
	2021	5.9%	37.4%	53.1%	3.4%	0.2%
	2022	4.9%	37.8%	55.1%	1.7%	1.6%
	2023	7.8%	41.5%	46.8%	3.5%	0.4%
	2024	14.5%	40.5%	41.6%	2.4%	0.7%

③柔道整復師になるための総合力

表 8 柔道整復師になるための総合力

質問項目	年度	回答内容				
		十分付いた	かなりついた	少し付いた	あまりついていない	全く付いていない
柔道整復師になるための総合力	2020	3.3%	31.2%	54.3%	10.1%	1.3%
	2021	5.0%	28.5%	60.4%	6.2%	0.0%
	2022	5.2%	30.2%	57.9%	5.7%	1.1%
	2023	7.0%	33.5%	53.1%	5.6%	0.8%
	2024	14.3%	35.0%	44.3%	5.1%	1.3%

また2024年度における各学年の質問項目①、②、③について、回答の平均スコアは表9の通りであった。

表 9 各学年の平均スコア(2024 年度)

	①（基本知識）	②（基本技術）	③（総合力）
1 年生	3.67	3.67	3.64
2 年生	3.74	3.70	3.54
3 年生	3.49	3.48	3.36
4 年生	3.82	3.78	3.68

- 【スコア】
- 5： 充分付いた
 - 4： かなり付いた
 - 3： 少し付いた
 - 2： あまり付いていない
 - 1： 全く付いていない又は該当しない

項目①②③ともに2024年度は「十分ついた」「かなりついた」の割合が大きく増加し、過去5年間で最高の値を示した。特に①「柔道整復に関する基本的な知識」および②「基本的な技術」においては、「十分ついた」と回答した学生が顕著に増加しており、学修成果の向上がうかがえる。また、③「柔道整復師になるための総合力」についても、例年より高い水準が確認された。

学年別（表9）にみると、今年度も4年生のスコアが①～③いずれの項目でも最も高く、知識・技術・総合力における成長の実感が得られていることが分かる。これは、国家試験対策や臨床実習、就職活動などを通じて、柔道整復師としての自己認識が深まり、学びへの自己評価が高まった結果と考えられる。

一方で、2・3年生のスコアが他学年よりやや低く、特に③においては3年生が最も低値を示している。これは専門的な学修内容が増す中で、習得の困難さや将来像への不安が影響している可能性があると考えられる。

以上より、全体的な向上傾向の背景には、教育内容の改善（学修支援体制の充実）および学生の自己評価の向上があると推察される。

2024 年度 ヒューマンケア学部鍼灸学科

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

鍼灸学科では、全学科共通のアンケート調査内容に加えて、教育課程編成・実施の方針であるカリキュラムポリシー（CP）を参考として4年間の学生の達成度を確認し改善策を示すためのアンケート調査を行った。そこで、まず、調査アンケート項目に基づき、「授業関連について」、「1日の時間の過ごし方・時間の使い方について」、「本学の設備や教育内容・学修支援について」、「不安や悩みについて」についてまとめた。次に、CPに基づき、「コミュニケーション能力や情報活用力、社会に貢献できる基礎力の養成について」、「基礎科目から専門科目の修得状況」「鍼灸師としての社会への貢献、責任感、倫理観、自己管理能力に関して」、「知識の統合、卒業研究における専門領域内の新たな課題を発見・解決する修練」について1年生から4年生まで回答者269名を対象としてデータをまとめた。最後に、4年間の学修を行うことでの「成長の実感と満足度」について、4年生に焦点を絞りまとめた。各事項について、今回の調査で示された要点は以下の通りである。

1. 授業関連について

「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」（表1）については、どの学年においても例年同様、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答したものが多数を占めていた。2024年は、2022年と2023年と比較して、「頻繁にした」「かなりした」の割合が増えていた。特に4年生の回答での増加が見られたことから、この割合が維持できるようにしたい。一方で、4年生と全体を通して、「あまりしなかった」「全くしなかった」の割合に変化が認められなかった。この層にどのような指導をしていくか、引き続き学科で検討していきたい。

表1：授業の予習や復習、授業課題のための勉強（2022,2023,2024年度との比較）

4年	頻繁にした	かなりした	時々した	あまりしなかった	全くしなかった
2022年	14.0%	26.7%	54.7%	3.5%	1.2%
2023年	15.1%	37.0%	45.2%	2.7%	0%
2024年	26.7%	43.3%	25.0%	3.3%	1.7%
全体	頻繁にした	かなりした	時々した	あまりしなかった	全くしなかった
2022年	7.4%	28.3%	60.8%	7.4%	1.0%
2023年	8.1%	26.4%	51.2%	12.9%	3.7%
2024年	16.0%	31.2%	45.0%	11.4%	2.8%

次に、「就職や資格取得に関わる勉強をした」では、昨年同様、学年が上がるにつれ「あまりしなかった」「全くしなかった」と回答した割合が低下し、4年生においては「あまりしなかった」が2名(3.0%)、「全くしなかった」は0名(0%)と非常に少数であった。本学科では、はり師・きゅう師の国家試験の受験に向けた取り組みを、1年次よりセミナーや講義を通じて様々な形で取り組みを行っている。また、「はり師・きゅう師」だけでなく、「健康運動実践指導者」「日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー」といった資格取得も目指して学修に取り組む学生もいる。このような継続的な学習支援体制と多様な目標設定が、学生の学習意欲を高め、今回の結果につながっていると考えられる。

「友人と一緒に勉強」という設問では、「頻繁にした」「かなりした」と回答した学生の割合が、学年が上がるにつれて高くなり、4年生では約6割の学生が友人とともに学習していたことがわかった。これは、共通の目標に向かって協力し合いながら、お互いに切磋琢磨する姿勢が伺えた。また、**学内での勉強場所**の利用状況をみると、メディアライブラリーセンター(図書館)を「頻繁にした」「かなりした」が56.7%。学内の自習用教室を「頻繁にした」「かなりした」が40.0%と大学の施設を積極的に活用していることが伺えた。一方で、「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」という設問では、「頻繁にした」「かなりした」が30.0%にとどまり、まだ十分に活用されているとは言い難い。引き続き、教員側は学生からの問いや要望を待つのではなく、積極的にコミュニケーションを図る姿勢が求められる。これによって、学生生活がさらに充実したものとなることが期待される。

2. 1日の過ごし方・時間の使い方について

「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」は、学年が上がるにつれて増加傾向にあり、4年生では3時間以上と回答した学生が4割を超えていた。このことから、多くの学生が自身の目指すべき資格修得に向けて、主体的に学修に取り組んでいることが伺えた。

「睡眠時間」は、6時間未満と回答した学生が約7割にのぼり、これは大学全体の平均(約6割)と比較しても短い結果となった。睡眠不足は、日中の眠気や居眠り、疲労だけでなく、情緒不安定や作業効率の低下、さらには学業成績の低下などにも影響を及ぼすとの報告もあることから、「適正な睡眠時間の確保」に関する指導も必要であることが考えられた。

「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数」について、1-3年では「なし」または「1回」と回答した学生は5割以上、4年生は約3割と学年が上がるにつれて欠席回数が減少していた。しかし、4年生は「2回」「3回」「5回以上」を選択した割合が他の学年と比べると高く、学年が上がるにつれて欠席回数が減少しているとは一概に言えず、4年次の欠席回数が多い学生に対する対応の在り方について、改めて検討する必要がある。

「部活動やサークル活動を行った回数」と「アルバイトの回数」について、例年と同様に、部活動やサークルに所属している学生は少なく、アルバイトをしている学生が多数みられ

た。また、アルバイトに関しては、4年次になるとその回数が減少しており、この傾向は卒業や資格取得に向けた学修時間の増加によるものと推察される。

3. 本学の設備や教育内容・学修支援について

「授業の内容」について、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」と回答した学生の割合は、1年生 96.8%、2年生 88.9%、3年生 93.3%、4年生 93.3%であった。また、「**所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容**」に関しても、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」と回答した学生の割合は、1年生 100.0%、2年生 97.2%、3年生 97.3%、4年生 96.7%と、いずれの学年においても9割以上の学生が満足している結果となった。一方で、「授業の内容」と「教育内容」に関して「とても満足」と回答した割合は、2年生と3年生でやや低下していることが確認された。この傾向の背景には、学年特有のものなのか、学修内容の問題なのかなど、その要因について今後検討を進める必要がある。

次に、「**学科・コースの教員による指導・相談**」について、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」と回答した学生の割合は、1年生 100.0%、2年生 98.6%、3年生 96.0%、4年生 95.0%と、いずれの学年においても9割以上の学生が満足している結果となった。しかしながら、「とても満足」と回答した割合は、2年生以降で徐々に低下していることが確認された。この結果を踏まえると、教員は現状に満足することなく、入学当初の高い満足度を継続的に維持するための取り組みを一層強化していく必要がある。

4. 不安や悩みについて

「授業の内容についていけない」について、「大いにある」「少しある」と回答した学生の割合は、1年生 64.5%、2年生 54.2%、3年生 40.0%、4年生 38.3%と、1年生が最も高い結果となった。この背景には、高校から大学の環境の変化に加え、これまで触れたことがない東洋医学的な考え方に直面することによる戸惑いなどが影響しているかもしれない。一方、「大いにある」の回答した割合に注目すると、1年生 11.3%、2年生 5.6%、3年生 5.3%と一度減少したのち、4年生で 11.7%と再び上昇する。この要因としては、卒業を控えた4年次において、これまで学んだ総合的な知識の理解や応用力が求められることが考えられる。

「希望の就職先や進学先へ行けるか不安」、「学内の友人関係に悩み」、「家族との関係に悩み」、「身体面の健康状態への不安や悩み」、「精神面の健康状態への不安や悩み」について、学科全体と大学全体で大きな差は認められなかった。「主な相談相手」に関しても、例年通り友人と家族が主であったが、一部の学生は大学の教職員にも不安や悩みを打ち明けている。このような相談を受けた際は、今後も丁寧に対応していく必要がある。また、誰とも相談しないと回答した学生も一定数存在しており、こうした学生が抱える不安や悩みが就学意欲等に悪影響を及ぼさないよう、セミナー時の面談など支援体制が整っていることを引き続き周知したい。

5. 入学時からの変化

5-1) コミュニケーション能力や情報活用力、社会に貢献できる基礎力の養成

社会に貢献するための基礎力として、コミュニケーション能力や他の人との協働は重要である。「人とコミュニケーションする力」および「他の人と協働しながら物事を進める力」の設問において、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した学生の割合は、いずれも9割を超えていた。また、「十分付いた」の割合に注目すると、

「人とコミュニケーションする力」

1年生 27.4%、2年生 18.1%、3年生 17.3%、4年生 31.7%

「他の人と協働しながら物事を進める力」

1年生 24.2%、2年生 19.4%、3年生 14.7%、4年生 38.3%

いずれも4年生が最も高い結果となった。この背景には、4年次になると、臨床実習や卒業研究発表など、個人ではなく他者と関わりながら取り組む授業が増えることに加え、就職活動を通じて社会との関わりが本格化することが、これらの力の向上に関係しているかもしれない。

また、情報活用や社会貢献として、「幅広い知識と教養」、「文章を書く力」、「自分のキャリア」、「自分の考えをまとめて発表する力」に関する項目が該当すると考えている。これらの項目においても、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した学生の割合は、概ね9割を超えていた。また、「十分付いた」の割合に注目すると、

「幅広い知識と教養」

1年生 22.6%、2年生 15.3%、3年生 17.3%、4年生 33.3%

「文章を書く力」

1年生 12.9%、2年生 11.1%、3年生 13.3%、4年生 26.7%

「自分のキャリア」

1年生 21.0%、2年生 20.8%、3年生 17.3%、4年生 35.0%、

「自分の考えをまとめて発表する力」

1年生 21.0%、2年生 15.3%、3年生 13.3%、4年生 31.7%

いずれも4年生が最も高い結果を示した。この結果は、4年次になると授業内での課題解決や自分のキャリア形成に向けた調査、整理、発表の機会が増えることに起因していると考えられる。また、こうした学修成果や得られた情報をいかにして社会に還元していくかが引き続きの課題である。

5-2) 基礎科目から専門科目の修得状況

本学科のカリキュラムポリシーは、「はり師・きゅう師等、国家資格取得に必要な科目は、4年間にわたり系統的に配置する」としている。「人体の構造（解剖学）に関する基本的知識」、「人体の機能（生理学）に関する基本的知識」、「病気（内科・外科・神経系）に関する基礎知識」、「リハビリテーションに関する知識」、「公衆衛生に関する知識」、「関係法規基礎

知識」、「東洋医学に関する知識」、「鍼灸治療の主な理論に関する基礎知識」、「鍼灸治療の対象・目的・方法に関する知識」、「身体診察（理学検査、四診など）に関する基本的な知識」、「経絡経穴に関する基礎知識」について、各科目の修得状況を見ると、「十分付いた」を回答した割合いずれも4年生が最も高く（表2）、「全く付いていない／該当しない」を回答した者はいなかった。この結果は、4年次に次において卒業を目前に控え、これまで学んできた内容を総合的に復習・整理する機会が多くなることが要因の一つと考えられる。今後も、こうした修得度の向上を目指し、さらなる教育の質の充実に努めていきたい。

表2：学年別、各知識で「十分付いた」を回答した割合

	1 年	2 年	3 年	4 年
解剖学	22.6%	12.5%	12.0%	23.3%
生理学	14.5%	9.7%	12.0%	26.7%
内科・外科・神経系	16.1%	8.3%	10.7%	23.3%
リハビリテーション	14.5%	8.3%	9.3%	21.7%
公衆衛生	14.5%	11.1%	14.7%	23.3%
関係法規基礎	12.9%	9.7%	17.3%	30.0%
東洋医学	16.1%	5.6%	12.0%	23.3%
鍼灸治療の主な理論	19.4%	8.3%	10.7%	21.7%
鍼灸治療の対象・目的・方法	19.4%	9.7%	12.0%	28.3%
身体診察（理学検査、四診など）	12.9%	11.1%	14.7%	26.7%
経絡経穴	21.0%	5.6%	13.3%	30.0%

5-3) 鍼灸師としての社会への貢献、責任感、倫理観、自己管理能力に関して

ここでは、「健康や生活を自己管理する力」「鍼灸師の役割に対する理解」、「鍼灸師になる使命感・責任感・倫理観」、「守秘義務の理解」、「患者の人権を尊重する態度」、「患者や家族に対する思いやり」、「人の意見に耳を傾け共感する態度」などの設問が該当する。いずれの項目においても、「十分付いた」を回答した割合は4年生が最も高かった。これは、鍼灸師を志して入学し、セミナー、実習、講義など学年を通じて鍼灸師としての仕事や役割について継続的に考え、認識を深めてきたことの成果が表れている可能性がある。

5-4) 知識の統合、卒業研究における専門領域内の新たな課題を発見・解決する修練

現在、本学科では3年次後期から4年次前期にかけて卒業研究を実施している。ここで

は、「物事を分析的・批判的に見る力」、「問題を見つけて解決する力」、「鍼灸の研究への興味と関心」、「鍼灸を研究する意義の理解」、「研究倫理への理解」などの設問が該当する。いずれの項目においても、「十分付いた」を回答した割合は4年生が最も高かった。この結果は、各学年のセミナーと卒業研究の連携が効果を上げていることが考えられる。具体的には、1年次には教員の研究内容について調査し、2年次には日本語文献の検索、3年次には英語文献の検索などを行うといった段階的な学習を通して、研究への理解と関心が徐々にさらに深め、その結果が4年次に表れている可能性がある。

6.4 年の成長の実感・満足度について

上記のまとめからも分かるように、今回の4年生の回答からは、専門性の向上とともに、学習習慣、協働性、自己管理能力といった社会に出るうえで重要な基礎的能力が着実に身に付いてきている様子が伺える。この結果は、本学科における教育支援の取り組みが一定の成果を上げている可能性を示している。一方で、学業・健康・将来に対する不安や一部の取り組み不足層への対応は引き続きの課題である。教員は、これらの成果と課題を十分にふまえたうえで、4年間の学修成果を最大化するために支援体制の一層の充実を図り、学生が自身の成長を実感し、より高い満足を得られるような教育体制の構築を目指していく必要がある。